

園遊會

岩代須賀川本町

服部貞子

師の君の開會の辭終りて、音樂隊面白き越後獅子は始まりぬ。

赤のたすきに白の前掛お揃ひの君々は、各々店に入りて、やさしき聲に客を呼ぶ、
さてもお可笑げなるよ。

お團子屋

藤棚を其まゝにて、長き腰掛は、はやう客を乗せ居ぬ。花房は五分通り開きて、
うつくしく白き頬をなづる心地よさ、まして、主任は彼の清子の君。

白き前掛うつりよく、白き面をほの赤うさしてお働きぶり、

「いらッしやいよう！」のほゝ笑みには、誰れしも引き入られてか。

お蜜柑屋

ゆかしきは、其の味なるよ、かわきし口には、此の上なら……。

こゝなかなかの賑ひなり。

あるじは幸子の君、築山の上の芝生に、笹もてさゝやかにしつらひたれど、

彼方の笑ひ聲は……オゝ落語家ならんか。

葡萄酒屋

池に臨める吾妻屋の中央に、テーブルを据えて、椅子五六脚、

こゝは大抵師の君方のみなり。

出でんとすれば、繁子の君、

「まあ先生ちッとしてお出でなさい！」とつきつくるはコップ。

すさまじきことよ。

おすし屋

白と淺黃幕に圍みたる岡の上。主任は松子の君にて、

通る人々を無理に引き入れて進め給ふなれど、

手をつくる人は、あらばこそ、箸もつけずに……。後にて大笑ひしぬ。

折しも演劇開始のベルの音しきりなり。あたゝかき風小波をたゝせて、
皆人の足を彼方に、聞ゆるこたびのマーチなるべし。

底本…「水野仙子全集」第五卷

初出…「女子文壇」明治三十八年五月

テキスト入力…小林 徹

公開…平成三十年二月二十三日

リンク…[水野仙子ホームページ](#)